

# 機動ゲーム戦士ネプ テューヌ00

リンボの鬼神

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

14年前、ある事件により全てを失ったティア。

その襲撃者はテストのダミーに紛れて奇襲を仕掛けてきた。ティアは地下施設に逃げ込み、そこでガンダムエクシアと出会う。彼はエクシアに乗り、襲撃者を迎え撃つ。

# 目次

1 話	白い巨人、ガンダム	1
2 話	断罪の剣	21



# 1話 白い巨人、ガンダム

「はあ……はあ……」

走っている。いや、走っているというよりは逃げている。1人の女性に、自分の姉に手を引かれ、必死に走っている。

後ろには巨大な何かが銃のようなモノで街を破壊していた。

自分達は「それ」から逃げていた。

「うわっ！」

何かが足に引っかかり、転んでしまった。

「大丈夫!?!怪我は!?!」

「大丈夫だよ……このくら……いッ……!」

痛みが酷くて立つので精一杯だ。

「ほら、お姉ちゃんの中で背中……早く……。ハッ!?!」

「どうしたのお姉ちゃ……!?!」

驚いている姉の視線を追うと、あの「巨大な何か」がこちらを見下ろし、こちらに銃口を向けていた。

「ッ!!」

「うわっ!」

ドンツと、姉に強く突き飛ばされた。と同時に銃口から紅い光が放たれ……

「生きて……!」

姉がそう言った瞬間、紅い光が建物に直撃、姉が居た場所に崩れた。

「あ……お姉……ちや……」

崩れた建物を呆然と見つめていたら、今度はこつちに銃口が向けられた。

「あ……あ……」

終わった。もう助からない。そう思った瞬間、何処からともなく飛来した蒼い光が

「巨大な何か」を貫いた。

「巨大な何か」は爆散し、黒煙を吹き上げながら倒れた。

「え……?何……?」

後ろに振り返ると、蒼白い巨人がその場に佇んでいた。肩にはL0のエンブレム。

「ホワイトハート……様……?」

その巨人から人が、いや、女神様が降りてきた。

ホワハ「危ねえ、ギリギリ間に合ったか……!おい、大丈夫か!?!怪我はねえか!?!」

「大丈夫……ハッ!」



何かに弾かれるように飛び起きた。またあの夢だ。何度も繰り返している。

「…はあ…、またか……。もう何回目だ…?」

あの「事件」からもう14年になる。それで降同じ夢が続く。最早悪夢だ。

「数えるだけ意味無いか……。って汗が……。仕方ない、シャワー浴びてくるか。」

ベッドから立ち上がり、着替えとタオルを持ってシャワー室へ向かう。

おっと自己紹介がまだだったな。俺はティア。ただの青年さ。

ティア「ふいー、さっぱりした。さてさて飯飯…つと!」

こちら目掛けて四角い何かがかつ飛んできた。俺はそれを片手でキャッチする。

ティア「あつぶね…。ってこれ辞典じゃねえか、直撃したら即死だったぜ…。ま、投げた犯人は分かっているがな。」

飛んできた方向を見ると、小柄な2人の少女がこちらを見ていた。

ティア「…投げたのはラムだな?」

ラム「わー!につげろー!」

ロム「ラムちゃん待つて〜! (あわあわ)」

ティア「逃げ足の早いこと…。別に追い掛けたりしないんだがなあ。」

今逃げていったのはロムとラム。俺の住んでる国、ルウイーの女神候補生だ。…超イ



タズラ好きだが。

ティア「さて、この本の持ち主は今頃おかんむりだろうな…。」

そんな俺の予想は見事の中。

ブラン「ロムウ！ラムウ！どこ行きやがっ……、あ、ティア。起きてたのね。」

ティア「起きてシャワー浴びてたつてところかな……、本が飛んでくるのは予想外だったが。」

この少女はブラン、ルウイーの守護女神、ホワイトハートだ。あの事件で何もかも失った俺を助けてくれた。

ティア「あ、そうだ。ほら、これ。捜し物だろ？」

ブランに辞典を手渡す。

ブラン「ありがとう、助かるわ。……またあの夢を見たのね？顔色が悪いわ。」

ティア「あー…、うん。もう慣れたけどな。」

ブラン「あまり無理しないで、ほら。」

ブランが両腕を広げて誘ってくる。

ティア「……………」

惹かれるがままに、ブランに寄っていき、そのまま抱きしめられる。

ブラン「よしよし、いい子、いい子。」

ティア「くくくくくッ」

気恥しい、めつちや気恥しい。けど、心が安らぐ。

姉さんも自分が落ち込んでいたりした時に、いつもこうしてくれた。

ティア「ありがとう、気が楽になったよ。」

ブラン「あなたの気が楽になってくれれば、私も気が楽になるわ。あ、確か今日は新型のテストだから急がなくていいよ。」

ティア「そういえばそんなこと言ってたな……。新型、か。」

ここで少し説明。

プラネテューヌ、ラステイション、ルウイー、リーンボックスは、それぞれMS（モビルスーツ）を所有している。

プラネテューヌにはジンクス、フラッグ。ラステイションはフラッグのみ。ルウイーにはジンクス、ティエレン。リーンボックスにはジンクスのみ。と、こんな感じに国ごとに所有するMSに違いがある。今ブランが言ってた新型は、ブラン専用機に向けて開発された武器、「GNハンマーアックス」というモノで、その性能を確かめるためのテストを今日行うという。

ブラン「私のジンクスもそれに向けて改良されてるから、大いに期待できるわ。ティアも付き合ってくれるかしら？」

ティア「まー、今日も今日とてやることねえしな…。分かった、付き合うぜ。」

ブラン「ふふ、ありがとう。あ、テストには他の女神達、ネプテューヌ達も来るみたいだから、気をつけて。特にベールには、ね。」

ティア「んー、何で気をつけなきゃいけないか分からないけど…。」

ブラン「とにかく、準備を急ぎましょ。」

ティア「おいおい慌てんなって…。」

ネプテューヌ「やほー！来たよーブランく！」

ノワール「遊びに来たんじゃないのよネプテューヌ！たく…。」

ベール「ルウイーの新型、それより、ティアは居ませんか？」

ティア「一応いるけど…。やっぱ俺目当てなんすね…。」

ベール「当然ですわ！早く抱きしめさせてくださいな！」

ティア「わー！ストップストップ！」

ブラン「おいゴリア！テストの視察に来たんだろーが！！ティアに抱きつこうとするんじゃない！！」

ベール「あら、良いではありませんの？」

ベールさんがその豊満な胸をわざとらしく揺らす。

ブラン「があアアアアア！てめえわざとやってんだろ！」

ティア「あははは……。」

大丈夫なのかこれ。まあ、いつも通りの平和な光景だけど。

ブラン「まあ、いいわ。早くテストを始めるわよ。私のジンクスは準備出来てるかしら？」

整備班「いつでもいけます！よし、出せ！」

同時に格納庫から、巨大な斧とハンマーが合体したような兵器、GNハンマーアックスが現れた。ブランのジンクスはそれを軽々と持ち上げ、

ブラン「よし、テスト開始……、でりゃあ!!!」

GNハンマーアックスは勢いよく振り下ろされ、そこにあつたダミーのフラッグを一瞬で木っ端微塵にしてしまった。

ネプテューヌ「あわわわ…、流石新型…。とんでもない威力だよ…。」

ノワール「まさにブランそのものを体現した兵器つてとこね…。」

ベール「わたくしの胸も揺れるほどの威力ですわね…！」

ノワール「いや、ベールは元から揺れてたでしょ…。」

ブラン「よし、この調子で…、え？」

ティア「ブラン、どうした？」

ブラン「いや…、確かダミーって3機だけよね…？整備班、どうなの？」  
整備班「え？はい、ダミーは3機のはずですが…、あれ？いつの間にか増えてる…。お  
い、あそこに余計にダミー置いたの誰だ!？」

整備班の人達がザワザワしている。恐らくだれも知らないのだろう。

ティア「……。」

あのダミー…、見覚えが……。

ブラン「とりあえず、誰か撤去してくれないかしら。」

整備班「了解しました。では自分が。」

整備班がティエレンに乗り、撤去作業に取り掛かる。

整備班「まったく、誰だよここに置いたの…。」

ティア「……あ……!」

あの夢を思い出した。あの「巨大な何か」…。

ティア「ツ！そいつから離れる!!」

整備班「えっ？離れるってどういう——」

もう遅かった。整備班のティエレンを、紅い光が貫いていた。ティエレンは爆発し、  
煙を上げながらその場に崩れた。

ブラン「ツ!？」

ネプテューヌ「ねぶう!!」

ノワール「のわっ!!」

ベール「ツ!どういうことですか!?!何が…!」

ベールさん達が動揺し始める中、他の整備班も慌てだした。

「あの機体色…あの事件の時のやつだ!!!また来やがったんだ!!!」

「逃げルルオオオ!殺されるぞ!」

辺りがパニックに陥る。やっぱり、あの時の…!!

ティア「あいつら…、あれで満足してないのかよ…!まだ…!」

ブラン「ちい…!おい、ネプテューヌ!ノワール!ベール!お前らも戦え!そして戦

闘可能な奴はすぐ出撃しろ!ルウイーを守れ!これ以上犠牲者を出すな!!!」

ネプテューヌ「もちろんだよ!」

ノワール「やってやろうじゃないの!」

ベール「これ以上好き勝手はさせませんわ!」

それぞれが専用機に乗り、臨戦態勢に入った。

ティア「ブラン!」

ブラン「ティアは急いで教会の地下施設に逃げろ!!!そこなら安全だ!」

ティア「……!」

ブラン「心配すんな。私はルウィーの守護女神だ、負けるわけねえ!!」

ティア「分かった…、死ぬなよ!」

ブラン「ああ!」

俺は急いで教会に走っていった。

ティア「はあ…、はあ…。地下施設の入り口は…ここか!」

鋼鉄性の扉を開け、急いで中に入る。

ティア「だあつ!」

そして扉を蹴って閉めた。これで大丈夫だ…。

ティア「ブラン達、大丈夫かな…。いくら女神といえ…、いや、今は生き残ることが優先だな…。」

とりあえず地下施設の奥に進むことにした。しかしかなり暗いせいで、何も見えな  
い。

ティア「壁にそって歩けば…うわっ!」

何かにぶつかった。

ティア「いって…、何だよも——」

何かに手を着いた瞬間、辺りが明るくなった。どうやら照明のスイッチのようだ。

ティア「うお眩し……ッ！って…、何だ、これ……。」

照明が着いた事により、今まで見えてなかったものが見えた。ティアの目の前には、巨大な白いMSがそこに居た。

ティア「何だこれ…、MSか？いや、見たことないぞこんな機体…、新型か？いや、新型ならとづくに知ってるはず…。あ、この端末生きてる、どれどれ…。」

端末に表示されていた情報を確認したところ、

ティア「GN-001 ガンダムエクシア…？この機体の名前か…。そしてこの武装は、GNソード……か。にしても誰が……。ん？メツセージがあるな。」

画面の右上にあったメツセージボックスを開いた。そこには、

『このメツセージを読んでいるということは、もう私はそこにはいないだろう。というより、この世にはいないだろうが正しいか。まあいい、それより、この機体は、今までのMSとは桁違いの性能を誇る。その力を何に使うかはその君の自由だ。だが、私は望むのは、この世界の、ゲームギョウ界の平和を護るために使ってほしい。この世界を守護する、四女神と共に……。頼む。』

ここでメツセージは終わっていた

ティア「……。」



俺は無言で、空いているエクシアのコックピットに乗り込んだ。

ティア「……俺は逃げてた。今まで。ブランに助けられて、それからも過去から逃げた。姉さんを失ったから……。何も出来なかつたから……。」

その瞬間、エクシアのシステムが機動した。まるで俺の言葉に応えるかのように。

ティア「だけど、それも今日までだ。もう、俺は逃げたりしない。これ以上……。大切な人を……。失つてたまるか……！」

操縦桿を握る手に力が籠る。

ティア「行くぞ、エクシア!!!」

そして、エクシアは飛翔する。過去という天井を突き破り、大切な人を護るために。

ホワハ「ちい……!こいつら、前より強くなってやがる!!!」

パプハ「ルウィーの教会まで引き付けたはいいけど……。ここからは時間の問題ね……。」

ブラハ「あんたららしくないわよネプテユース!……きやあつ!!!」

グリハ「ノワール!ああつ!」

ブラハ機とグリハ機が襲撃者ジンクスに蹴り飛ばされる。

パプハ「ノワール！ベール！ぐっ!!」

パプハ機も蹴撃をくらってしまい、その場に倒れた。

ホワハ「クソ、ティアがここにいてるってのに…!!」

そんなことを言っていたら、謎の通信が入った。

???「よオ、四女神さん達よオ？そんなんで国守れるのかあ？そんなあ、弱つちい機体  
でよお!!」

ホワハ「があっ!?!」

脚部をサーベルで斬られた。これじゃ、動けねえ…!!

???「おい、カメラ回せ。無様な女神様を全国中継するぞお。」

ホワハ「てめえら…!!」

???「うるせえ黙ってろ!」

ホワハ「ぐあっ!!」

機体を勢いよく踏みつけられる。そして、やつの機体はサーベルを構え、

???「今から女神処刑タイムだ、見逃すなよお???

襲撃者ジックスがサーベルを構えた。

ホワハ「ツツツ!!!」

クソ……!!

もうダメだ…、と思つた次の瞬間。

ドゴオンと、教会手前の地面が急に突き破られた。

??? 「あ？何だあ？」

ホワハ 「……？一体何が……」

土煙で何も見えないが、シルエットだけは見えた。次第に土煙が消えてきて、そのシルエットの正体が明らかになる。

ホワハ 「何だ、あの機体は……!?!」

今まで見てきた機体とはまるで別物だ……。まさか……。

??? 「何だア？てめえはア!?!」

ティア 「……これ以上……!?!」

この声、ティアか……!?!

ティア 「これ以上……、俺の仲間に……手を出すなアアア!!!」

その叫びと共に、白い機体は剣を携え、襲撃者ジnkクスに向かつていった。

ティア 「ウオオオオオオオツツツ!!!」

勢いに任せGNソードを振り下ろす。襲撃者ジnkクスは瞬く間に真つ二つになり、爆発四散した。

??? 2 「つつっ!?このや——」  
ティア「ぜらあアッアッアッアッ!!!」  
振り返りと共に切り払う。襲撃者ジンクスは上半身と下半身に綺麗に分かれ、爆発した。

パプハ「なんて強さなの:!?」

ブラハ「敵じゃ:無いのよね:~?」

グリハ「それにしても今の声:、まさかティアが乗っているんですの!?」

ホワハ「そう考えるしかねえだろうな:今は。」

ティア「次は:!?」

??? 3 「ツ!ひいひい!!?」

勝てないと察したのか、襲撃者ジンクスは逃げ出した。逃がすか:~!

ティア「はアアアアつつっ!」

一気に飛翔し、襲撃者ジンクスの足を掴み、地面に向かって投げ飛ばす。

??? 3 「ぎゃあつ!!」

ティア「だああああ!!!」

GNソードを機体中央に突き刺す。途端に、襲撃者ジンクスは動かなくなった。

ティア「後1機か:。」

??? 1 「やるじゃねえか。だが、俺のは高機動型だ。当てれるもんなら当ててみやがれえ!!!」

ホワハ「あの動き……、今の私たちじゃ……無理だ……!」

ティア「……………」

高機動型か……、どうしたら……。

ティア「……………? 何だこれ……。TRANS—AM?」

よく分からないが……、やるしかない!

ティア「トランザム!!!」

その掛け声と同時に、エクシアが紅く光り出す。

ホワハ「何だ!? 何が起こってる!?!」

パプハ「今、トランザムって……。」

??? 1 「なんだあ? 急に紅くなったぞ? まあ、俺のこの機動に追いつけるはずが——

」

ティア「ウオオオオオオオオツツ!!!」

一瞬で襲撃者リーダーダージンクスの間合いに入った。

??? 1 「なにいつ!?!」

ティア「でえええやあアアアアツ!!!」



ブラン「……………ア！……………イア！……………ティア！！」

ティア「……………ん……………？あれ、ここは…。ああ、あの後気絶したのか、俺…。」  
どうやらあの後気を失って、ブラン達に介抱された模様。

ブラン「よかった…。無事で……………」

ティア「ああ……………。というより皆は……………」

ネプテューヌ「私達は大丈夫だよー！ぶい！」

ノワール「あなたねえ……………」

ベール「よかったですわ…無事で……………！」

ティア「うわつと…、まあ、今はいいか。」

ベールさんに抱きつかれるのは予想してた。今はかなり疲れてるため、ベールさんの胸の感触が心地良い…。

ブラン「ベール……………まあ、今は許してあげるわ。今は。」

そういうえば、聞きたいことが……………」

ティア「そうだ、ブラン。俺が乗ってた機体、エクシアっていうんだけど、知らないか？」

ブラン「いや、私は知らないわ。ていうか、その機体、どこにあったの……………」

ティア「え、ルウイーの地下施設だけ……………？」





## 2話 断罪の剣

ティア「ダメだ……、全く分からねえ…。ていうか文字化けしすぎだろこのデータ…  
というか暗号!!!」

今俺はエクシアに内蔵されていたデータをブランと一緒に解析していた。ただ、ほとんどが暗号化されたり文字化けしたり、ろくに解析が進んでない。

ティア「ブラン、そっちはどう……」

ブラン「だああああ!!!分かるかこんなもん!!!文字化けしすぎて訳わかんねえよ!!!これ  
作った奴は何考えてんだ!!!」

案の定、キーボードを叩きながら画面に向かって叫んでいた。

ティア「ああ、やっぱりな……。それにしても…。」

あの日の翌日、各国でも同じようにガンダムタイプが見つかったという。プラネテューヌでは「ヴァーチェ」、ラスティションでは「デュナメス」、リーンボックスでは「キュリオス」、といった感じに地下施設にあったという。ただ、キュリオスだけはガンダムというよりは戦闘機という見た目のようだ。ベールさんも、

ベール「これ、モビルスーツというよりは、戦闘機じゃないんですの…?」

とってたくらいだし…。

ブラン「とりあえず、解析はもうやめましょう。疲れたわ…。がく」

ティア「あ、おいブラン!？」

ブランがキーボードに突っ伏して気絶してしまった。そーいやブラン、寝ずに解析してたんだっけか…。

ティア「はあ、とりあえずブランの部屋まで運ぼう…。」

ティア「よつと…。ふう、これでよし…と。じゃ、ゆっくり休めよ。おやすみ。」

ブランをベッドに寝かせ、部屋から出る。と、同時にロムとラムとぼったりあった。

ラム「お姉ちゃん、気絶したみたいだけど、大丈夫なの?」

ロム「心配…。(ソワソワ)」

ティア「ああ、大丈夫だ。疲れて寝てるだけだし、ゆっくりさせてやってくれ。とりあえず…」

何か言いかけたところ、ポケットに入れていた通信端末が鳴りだす。どうやらラストエディションからのようだ。

ティア「ん、なんだろう…。もしもし?」

ノワール「あ、ティア!? 悪いんだけど、今すぐ来て!! やつらが攻めてきたの!!! こつち

も迎撃してるけど、いつまで持つか分からないわ！」

ティア「ツ!? : わかった、今すぐ向かう!! それまで持ちこたえてくれ!!」

ロム「どうしたの : ? ラステイションになにかあったの : ?」

ラム「今、やつらが攻めてきたって : 。」

ティア「とりあえず、ロムとラムはブランの部屋にいるんだ。絶対、ブランの傍から

離れるなよ! それじゃ!」

ロム「わかったよ!」

ラム「わかった!」

俺はロムとラムに見送られ、急いでエクシアの格納庫へ向かった。

ティア「おやっさん、エクシアは出せるか!」

おやっさん「おうよ! 準備万端だ、いつでも行け!」

ティア「ありがとう! それじゃ!」

俺はエクシアに飛び乗り、システムを起動。おやっさん達は発進準備を急ピッチで済ませてくれた。

整備班「エクシア、発進どうぞ!!」

ティア「了解、ガンダムエクシア、出撃する！」

俺とエクシアは飛翔し、ラストイションへと向かう。

ブラハ「はあっ!!」

華麗な剣捌きで次々と襲撃者を両断する。半分以下までは撃破したはずだが、全く減っている気配がない。これじゃ、こつちのエネルギーが…、と、襲撃者ジンクスにいつの間にか背後に回り込まれていた。

ブラハ「しまっ……!きやあ!」

飛んできた蹴りをギリギリシールドでガードしたが、衝撃が強すぎてそのまま建物に激突してしまった。

ラストイション兵「ブラックハート様!大丈夫…うわっ!!」

ブラハ「あっ……。」

こちらを助けに来たフラッグが目の前で落とされた。よくも…!

ブラハ「こんのおおお!!」

ブースターをフルスロットルで吹かし、襲撃者ジンクスをタックルで吹っ飛ばし、ソニックブレードで切り裂く。絶えず襲撃者ジンクスは爆散した。

ブラハ「ごめんなさい…。仇はとるから…！」

撃破されてしまった自国の兵を見つめる。そして、再び空を見る。やはり減っている気配が無い。こちらの機体ももう持たない。それでも…。

ブラハ「無謀だつてのは分かつてるわ…。、それでも…。この国は…。私の国は…。この身がボロボロになつても…。絶対に護る!!」

そういつた次の瞬間、襲撃者ジンクスが立て続けに撃墜されていった。

ブラハ「え…？一体何が…。あつ!!」

空の彼方から、白い機体がこちらに向かつて来ている。まさか…！

ティア「ノワール！無事か!？」

ブラハ「ティア…来てくれたのね…！」

ティアが、エクシアが来てくれた…。これで、反撃出来る！

ブラハ「皆、まだ生きてるわね？ガンダムが来てくれたわ、さあ、反撃開始よ!!!」  
ラスティション兵達「うおおおおおおおおお!!!」

ティア「何かやけにテンション高いな…。まあ、いい。行くぞ、エクシア!!!」

ティア「これで、最後だアツ!!!」

最後の一機を撃墜し、1時間以上続いた戦闘は終わった。

ブラハ「ありがとう、ティア。あなたが来てくれなければ、私たちは今頃……」

ティア「そんなこと言うなって。皆無事……」

ブラハ「いえ、1機、落とされたわ……。私を守ろうとして……目の前で……」

それを聞いて、俺は今言おうとしてた言葉を取り消した。

ティア「ごめん、もう少し早く来ていれば……」

ブラハ「大丈夫……。気にしないで……。私達は無事だし、彼もきつと報われたわ……」

ティア「そうか、それなら……。ん？あれは……」

船着き場はかなり人が集まっている。何だろうか。

ティア「ノワール、あの人たちは？」

ブラハ「あの人たちは今から船でリーンボックスに向かうの。こつちが復旧するまで

しばらくはあっちに住んでもらう予定よ。」

ティア「なるほどな……。ん？」

一機のフラッグがこちらに近づいてくる。

ラスティション兵「ブラックハート様！緊急入電です！」

ブラハ「何？何かあったの？」

ラスティション兵「たった今入った情報によると、襲撃者の地上部隊がこちらに接近

中との事！」

ブラハ「なんですって!？」

ラスティション兵「敵地上部隊は高機動型ティエレン5機編成、内一機は重迫撃砲を装備しているとのことですよ！」

ティア「重迫撃砲……!まずいぞ！」

ブラハ「ここへの到達予想時間は!？」

ラスティション兵「後5分とのこ……うわっ!？」

背後から爆発音、振り返ると、そこにあつた建物が全壊している。既に敵地上部隊がすぐ近くまで迫っていた。

ブラハ「くっ、敵はいつでもこちらを潰せるといふことね……!？」

ノワールのフラッグがブースターを吹かしながら敵部隊に突っ込んでいく。

ティア「ノワール無茶だ!その機体の状態で!」

ブラハ「大丈夫、まだ戦える!」

しかし、敵の対空砲火が激しく、中々接近出来ずにいる。そんな中、重迫撃砲が再び火を吹いた。その先には、あの船が。

ティア「ちい、やらせるか!!トランザム!」

トランザムを起動し、急速で船に接近し、シールドを構え、重迫撃砲の弾を受け止め

る。

ティア「ぐっ……!!」

GNフィールドを展開しているとはいえ、重迫撃砲の反動は大きく、機体が少し仰け反ってしまう。

そして再び重迫撃砲から砲弾が放たれる。

ティア「うぐ……!!」

ブラハ「ティア!!」

これ以上は……! だけど……

ティア「この人達だけは……!!」

そして、重迫撃砲がこちらを捉えた……が、そのティエレンは遠方から放たれたビームによって撃ち抜かれた。

ブラハ「狙撃……!!? 一体……。」

ブラシス「遅れてごめん、お姉ちゃん! そしてティア!」

ブラハ「その声、まさかユニ!?! ということは……。」

ティア「…デユナメスか!!」

ラストイション郊外に、一機のMSがスナイパーライフルを構えている。間違いのない、GN-002、ガンダムデユナメスだ。



ブラシス「狙いは外さない!!!」

再びデュナメスが狙撃し、もう一機を撃破する。敵地上部隊は混乱に陥ったのか、バラバラに逃走を始める。

ブラシス「逃がしはしない!!」

GNスナイパーライフルを3連射、残りの3機を同時に撃破した。流石はユニだ。

ブラシス「これで終わりね……。お姉ちゃん、ティア、無事かしら?」

ティア「こっちは大丈夫だ。だけどノワールが……。」

ブラハ「大丈夫よ、この程度のダメージくらい……。あら?」

ノワールのフラッグが動かなくなってしまった。かなり損傷してるみたいだな…。

ブラハ「そんな…、私のフラッグが……。」

ティア「……ノワール、もう、そのフラッグは眠らせてあげよう。疲れてるんだ、俺

達と同じで。」

ブラハ「……分かったわ。」

ノワールがコックピットから降り、自分のフラッグに面と向かって

ブラハ「今までありがとう、お疲れ様。ゆっくり休んで……。」

ティア「さて、そろそろ帰るかな、ブラン起きてるだろうし。」

ユニ「もう帰っちゃうの？もう少しゆっくりしていけばいいのに。」

ティア「はは、また来た時にゆっくりさせてもらおうよ。それじゃノワールによろしくな。」

ユニ「うん、またね！」

ユニに手を振られ、俺はラストেশションを後にした。

ノワール「ティアはもう帰ったのね。」

ユニ「うん、ん？」

ユニが夕闇の空を見つめていた。

ノワール「ん？どうしたのユニ？」

ユニ「今何か、ルウイーの方向に黒い機体が飛んでいったような……。」

ノワール「黒い機体……？私は見えなかったわ。見間違いじゃない？」

ユニ「そうかなあ……。」

——ルウイー基地——

ティア「よし、そろそろ…。おやつさーん！聞こえるか？帰ったぞ〜！」

おやつさん「おうよ、ぼつちり聞こえてるぞ！よし、お前ら、出迎えの準備…：おうっ!？」

ブラン「ティア！」

ティア「お、ブランか。どうだ？よく眠れたか？」

ブラン「ええ、よく眠れたわ…。そういえば、ラストイションで何かあったみたいだ

けど…。」

ティア「ああ、その件だが解決したから大丈夫だ。怪我人も最小限に抑えられたし。」

ブラン「そう、よかったわ。後、ごめんなさい。気絶しちゃって…。」

ティア「気にするなつて。疲れたんなら仕方ないさ。さ、おやつさんに変わつてやつ

てくれ。」

ブラン「？ああ、ごめんなさい、どうぞ。」

おやつさん「大丈夫です、お気になさらず…。さ、お前ら、出迎えの準備だ!!急げえつ

！」

整備班達「おう！」

そこまでしなくてもいいんだけどな…。

ティア「さて、俺も…：っ!？」

おやつさん「おん？どうした？早く……」

ティア「おやつさん！レーダーに何か反応はあるか!？」

おやつさん「あ？何も反応はねえが……。どうした？」

レーダーに反応が無いとおやつさんは言ってるが、俺には分かる、何かがかつちに急速接近してくる……！

整備班「！こつちのレーダーに感あり!!エクシアに向けて突っ込んできます！」

ティア「つ！」

気づいた時には、目の前に黒い機体がこちら目掛けて迫っていた。

ティア「ちいっ!!」

咄嗟にライフフルモードで牽制するが、相手は怯まず突っ込んでくる。そして強烈なタツクルを受けてしまう。

ティア「うあっ！」

シールドで防いだのでなんとか地面との激突は免れた。

しかし、黒い機体はまだこちらを見据えていた。

ティア「あの機体…、ジnkスなのか…？それにしてもパワーが……、ぐっ!？」

黒い機体は急速接近し、ビームサーベルを振り下ろす。

こつちもGNビームサーベルで反撃する。と、

??? 「ガンダム…、ガンダムは殲滅する!!」

ティア 「っ!? 誰だ!？」

あの黒い機体のパイロットだろう、ガンダムは殲滅すると言っていたが…、狙いはエクシアか!

ティア 「お前が何でガンダムに恨みがあるかは分からないけど、この機体は、エクシアは破壊させない!!」

蹴りで黒い機体の体制を崩し、こちらもタツクルで吹っ飛ばす。

??? 「ぐうっ…っ! まだだっっ!!!」

しかしすぐ体制を建て直し、こちらに殴りかかってくる。

ティア 「しぶといな…っ! このおっ!!」

機体同士の拳がぶつかり合う。その時、

ティア 「っ!? 何だ!? 頭に何かが…!!」

??? 「うぐ…っ!? 何だ、これは…??」

あつちも同じことが起きている…? まさか、共鳴してるってのか…??

「ティア…!!」

ティア 「姉さん…?」

「お姉ちゃん……!」

??? 「ティア……?」

ティア、??? 「つつつ!」

お互い、弾かれたように距離をとる

ティア 「今の…昔の……。」

??? 「昔の……記憶……?」

頭がごつちやごちやになるが、それも一瞬で整理された。

??? 「ティア……? その機体に乗ってるのはティアなの……?」

聞き覚えのある声、

ティア 「その声、まさか……!」

ノイズが混じって聞き取りづらいが…この声は……!

ホワハ 「ティア! どいてろ!」

ティア 「つ!」

間に割って入るようにブランのジnkクスがGNハンマーアックスを振り下ろす。

??? 「ちっ!」

黒い機体はギリギリのところまで避け、そのまま飛び去っていった。

ティア「待ってくれ!! おい!!」

しかし、既に黒い機体は見えなくなっていた。

ホワハ「ティア、大丈夫か!？」

ティア「……。」

ホワハ「おい、ティア!？」

ティア「え? ああ、大丈夫だ、機体も大きな損傷は無いし……。」

ホワハ「はあ、ならいいんだが……。あの黒い機体、何者なんだ……? エクシアと張り

合うつて相当な奴だぞ……。」

ティア「なあ、ブラン。」

ホワハ「どうした? ティア。」

ティア「あの黒い機体と拳を交わした時、一瞬昔の光景が見えたんだ。」

ホワハ「昔の……?」

ティア「ああ……。そしたら、あのパイロットの声が聞こえたんだ……。」

——  
????  
——

「しくじったようだな。」

「……………」

「まあそう気を悪くするな、まだチャンスは残ってるんだからな。とりあえず、早く帰還しろ。ラヴィナ。」

ラヴィナ「…了解。」

母艦との通信を切り、機体を飛ばす。

ラヴィナ「ティア……、あなたとは戦わなくちやいけないの……？」

ホワハ「声……、つてまさか！」

ティア「ああ。そのまさかだ。」

もう、もう二度と会えないと思つてた。だけど……、あの黒い機体のパイロットは、間違いない。

ティア「姉さんは、ラヴィナ姉さんは生きてる!!」